

菩提心について

光地英学

本稿にては主として禅淨二教、なかんずく道元禪と親鸞教學との菩提心について考察してみることにする。まず菩提心の語義を述べ、一般仏教における菩提心の内容を略説し、次いで親鸞教學を中心とした淨土教の菩提心、次いで道元禪のそれを攻究し、最後に両教菩提心の様相を比較してみることにしたいと思う。この一部は會て当紀要(通巻第一六号)の拙稿「禅淨二教の信思想」において触れたことでもある。しかしこの度は、特に菩提心のみの問題に限定して考察を試みることにする。

いうまでもなく菩提心は、具さには阿耨多羅三藐三菩提心であり、無上菩提心、無上道心、無上道意、無上心、覺意、道意、赤心、古仏心、道心とも別称されることは周知のこと
に属する。それは仏道を体現しようとして精進する心である。仏道を行修しようとするものは、まず必ずこの心を発すべき

ものであるとされる。この心を発すのを発心あるいは発意ともいう。従って大乘菩薩道の行願には発心の必具であることはいうまでもない。經論にはこの菩提心ならびに発心の内容について諸説を以て論述している。これらのうちで最も仏教一般の当該思想を明示しているものは、蓋し、元曉の説ではないかと思う。彼はその「兩卷無量壽經宗要」に、隨事發心と順理發心を説き、隨事發心のうちに、四弘誓願の前三を行修することによって無上菩提の果、すなわち四弘誓願後一の仏道を円成することを表明している。彼の所説の如く、自利々他の行願果遂の上に仏道を成せんと志向するのが仏教一般の發心思想であると思われる。それでは禅淨二教の發心は、このような通仏教の發心觀においてどのような性格を有しているであろうか。これについて、常識的な立場ではあるにしても最も明快簡潔に要を指摘しているものに、良忠の「觀經玄義分伝通記」がある。同書一に次の如くいう。「菩提心有願有行。聖道菩提心於穢土中發願、於穢土中立行故難

行也。浄土菩提心、願在穢土一行在淨刹、故易行也」。良忠のこの見方は、浄土教の立場における聖浄二教の菩提心観ならびに発心観であつて、禅と浄土教のそれではない。まして道元禅と親鸞教学のそれでないこともちろんである。しかし彼のこの見方は、概括的に禅浄二教の菩提心、発心観の性格づけをしているものといつてもよいであらう。

二

浄土教の菩提心の代表思想として曇鸞の思想に注目する。

「論註」下「に「大経」の無上菩提心について、無上菩提心は願作仏心であり、度衆生心であるとなしている。この願作仏心は自利であり、度衆生心は利他である。この自利々他二行の二心を一菩提心の上にもみる。そしてこれを二俱に双運するのが、一般仏教々々学上からは大乘菩薩道であるが、この自利他心一俱の菩提心を以て自他ともに浄土往生を要期するのが浄土願生行者のあり方である。曇鸞はかかる菩提心の護持を弥陀如来に祈念して、「唯願慈光護念我、令我不得失菩提心」(讚阿弥陀仏偈)と表白し、如上の如き菩提心の上に、仏力を仰感している。しかし曇鸞の菩提心の主体は、自己であり衆生であることに変わりはない。

道綽は曇鸞の思想を継承しているのであるが、さらに菩提心の類別を試みている。彼は「安樂集」上第二大門にて、菩

菩提心について(光地)

提心を四点から考察している。第一は菩提心の功用である。菩提心の内含する心は空間的には虚空の如く遠大であると共に、時間的には未来際を尽くす。能くこの心を発すれば、無始以来の生死の無明を滅すると共に、仏果を円成する功用を発揮する。第二は菩提心の名体である。この名体に法身の菩提・報身の菩提・化身の菩提の別がある。法身の菩提は真如実相第一義空で自性清浄のものである。報身の菩提は万行を修してその酬いによる円通無礙なのをいう。化身の菩提とは報身の妙用として万機を化し円通自在なのをいう。第三は菩提心を発す発心の諸相である。これに三種があるこれは前の仏身の三身に対応するもので、一には自己の本来自性清浄であることを識達する、二には万行を修する、三には大慈悲心を以て衆生を濟度することである。第四は菩提心に関する問答解釈で、如上の如き菩提心の体相用を運用し、「論註」下の如く畢竟、衆生をして極樂浄土に往生せしめ、無上菩提を會得せしめんとするのであるが、かかる行願をなしてしかもその所行を忘ずるところに眞の菩提心の妙相と妙用があるとなすのである。この第四の精神を「安樂集」の最後に、「撰集流通徳、普施於一切、先發菩提心、同歸向浄國、皆共成仏道」と強調結着している。道綽の菩提心の目指すところは、要するに一切衆生相共に同じく菩提心を発して浄土に往生して菩提を円成するところにある。蓋し浄土教の菩提心の当然

の姿態を示したものであるというべきであろう。

善導も概ね道綽の菩提心思想と如同している。すなわち「般舟讚」散善三福に「三業起行多憍慢、单発無上菩提心」という。発菩提心の帰向するところは、「散善義」後跋に「悉発菩提心、慈心相向、仏眼相看、菩提眷属、作真善知識、同帰浄国、共成仏道」と示している如く、衆生と共に往生し、成仏するところにある。このことを善導は、自撰の各所でしばしば強調これ努めている。なお特に注目されることは、「願以此功德、平等施一切、同発菩提心、往生安樂国」（「玄義分」帰三宝偈）と偈頌していることである。いうまでもなくこの偈は後世浄土門一般にて梵唄誦經の最後に唱念するほど、重要な位置を有しているものである。殊に一切衆生と共に同じく菩提心を発さんと念願するところは、大乘仏数の精粹に連なるものである。しかし発心の主体はやはり、自己、衆生にある点、従来の鸞綽二師の系列とその軌を一にしているものとなし得る。

法然は「選択集」下、十二念仏付属章にて、天台・真言・三論・法相等の聖道諸宗の菩提心、そして浄土数における善導（觀經疏）のそののあることを指摘し、特に菩提心によつて往生すべきことを明言して「諸求往生之人、各須発自宗之菩提心。縦雖無余行、以菩提心為往生業也」といっている。往生には発心の必具であることは認容している

が、その発心の主体の衆生辺にあることにおいて、如上先師諸師と相違するところはない。

以上、諸師の菩提心は、(一)必ずその心を発すべきである。(二)悉く往生浄土に指向している。(三)それは自己及び一切衆生が仏力を感戴して同じく発心する。その発心の主体は自己ならびに衆生にある。この三点においていずれも軌を一にしているものとみられる。これに対し親鸞の菩提心觀はどうか。

聖人は、この菩提心についても二双四重の數判を弁立している。それは豎横の二種である。豎を分けて豎超・豎出、横を分けて横超・横出となすことを以てその内容とする。豎の二種は権実・顕蜜・大小乗の菩提心、すなわち自力の菩提心であれば、横出は正雜・定散他力中の自力のそれで、親鸞以外の一般浄土教の菩提心を總該する。前掲の曇鸞の菩提心もこの中に撰せられることはいうまでもない。聖道の菩提心はいうまでもないが、何故に正統浄土教諸師の菩提心を、そのように配慮したのであるか、いうまでもなく前述の如き願作仏心と度衆生心とは菩提心の内容であるが、凡夫低下のものとして、かかる自力的な菩提心を発起することはとうてい不可能に属するからである。「正像末和讚」三時讚にこのことを、「自力聖道の菩提心、こゝろもことばもおよばれず、常没流転の凡愚は、いかでか発起せしむべき」「十方無量の諸仏の、証誠護念のみことにて、自力の大菩提心の、かなはぬほ

どはしりぬべし」として、自力の菩提心を否定している。それでは横超の菩提心の特色を親鸞はいかに發揮しているが、「信巻」菩提心釈に、「横超者、斯乃願力廻向之信樂、是曰願作仏心。願作仏心即是横大菩提心、是名横超金剛心也」という。さらに「眞実信心即是金剛心、金剛心即是願作仏心、願作仏心即是度衆生、度衆生心即是撰取衆生ニ安樂浄土ニ心、是心即是大菩提心」（「信巻」一念転釈）「大菩提心即是眞実信心、眞実信心即是願作仏心、願作仏心即是度衆生心、度衆生心即是撰取衆生ニ安樂浄土ニ心」（文類聚鈔）と叙べている、そのところに發揮されている。従って願作仏心と度衆生心の二心は如来の大菩提心として廻向され、衆生の信の一念に同時に具足するものとされる。次の例証も、同一視点を表示したものに他ならない。「一心即是深心、深心即是堅固深信、堅固深信即是真心、真心即是金剛心、（中略）是心即是大菩提心、大菩提心即是眞実信心、眞実信心即是願作仏心、願作仏心即是度衆生心」（文類聚鈔）「この眞実信心を世親菩薩は『願作仏心』とのたまへり、これ浄土の大菩提心なり。しかればこの願作仏心はすなはち度衆生心なり」（唯信欽文意）「この信心を一心といふ、この一心を金剛心といふ、この金剛心を大菩提心といふなり。これすなはち他力のなかの他力なり」（末燈鈔）「信心すなはち一心なり。一心すなはち金剛心、金剛心は菩提心、この心すなはち他力なり」（高

僧和讃「天親讃」

いう如く如来の度衆生心によってわれらの願作仏心は恵まれ、それがやがて還相の摂化として度衆生心の活現となる。かく親鸞は、浄土教伝統祖師の菩提心を以て、仏他力のそれであると自らに消化し、信の一念を以て菩提心であると判釈した。その信にみる菩提心は往相のものであるから、自己のみに限られ、浄土教先驅諸師にみられたような度衆生心、同発菩提心はない。利他接化心は往生後の還来相の上に悉く要期せられる。この点信に菩提心を撰融したことと共に、親鸞菩提心觀の浄土教における特色とされなくてはならない。しかし度衆生心は還相にのみ期せられるものではあるが、それは獲信において総て予見されているものであるから、信に潜かに消極的に胚胎しているものとされ得るであろう。かかる意味における他力の信の菩提心思想に占める位置は、従来の浄土教史上において、異彩を放つものであるといってもあながち云い過ぎではないと思われる。

三

道元禅に占める菩提心の位置は極めて大きい。道元の全撰述も、ことごとく菩提心の運為とみてもあながち過言ではない。「道心巻」の劈頭に「仏道をもとむるには、まづ道心をさきとすべし」として菩提心の必須性を力説している。これに

類似の例文は尠くない。いうまでもなく、菩提心は仏教、禪行修の一貫的基本線であって、道元禪師もこれを本是としたことは贅言の要もない。しかし「永平広録」六に「流三転二十五有之際、有最難得之事。謂。生値三仏法一也。既遇三仏法、発菩提心亦最難也」として、発菩提心の至難なことを示している。それだけでも発心の要の強調せられるゆえんが胚胎するの理である。厳密にいつて禪師の道心思想のよってくる根拠は、この仏教の基本思想を以て遠因となすならば、師天童浄翁の垂訓が近因であると思われる。すなわち「天童如浄禅師行録」に如浄について、「常教訓衲子一謂、参禅学道第一可有道心、是学道之最初也」とある等は、その一端を示すものであるといひ得るであらう。

菩提心の内容は必ずしも一ではなく、はなはだ複雑なものがある。元来道心は慮知心をもっておこすのである。「発菩提心卷」に「おほよそ心三種あり。一者質多心、此方称慮知心。二者汗栗多心、此方称艸木心。三者矣栗多心、此方称積聚精要心」という。これは「摩訶止観」一上の次の文と軌を一にするものである。「菩提者天竺音也。此方称道。質多者天竺音此方言心。即慮知之心也。天竺又称汚栗駄。此方称是草木之心也。又称矣栗駄。此方是積聚精要者為心也」。「発菩提心卷」には前掲の文に続いて次の如くある。「このなかに菩提心をおこすこと、かならず慮知心をもちぬ

る。……この慮知心にあらざれば、菩提心をおこすことあたはず。この慮知心を、すなはち菩提心とするにはあらず。この慮知心をもて、菩提心をおこすなり」という。いう如く菩提心は全体的知覚的判断作用、すなわち慮知心を以て発起されるものに他ならない。けだし普通の平常心を以て発菩提でき得ないとするならば、発心の普遍性は期待されない結果となるからである。慮知心と菩提心は二ではない。発菩提心以前から、菩提心が慮知心の基盤として、自己に内在する。未発菩提心以前から本質的に内在するのが菩提心である。ただ慮知心の渋柿が無限の修証によって菩提の甘柿となるに過ぎない。「聞解」(発菩提心卷)もこのことを、「慮知心と菩提心と二つは無けれども、其間に修証がある。慮知心を其儘取りかへずに、菩提心とするでは無い。たとへば慮知心は渋柿なれども、修証すれば菩提の甘柿と成る」と示している。菩提心とは慮知心に呼び起された仏道に随順する心であり、始覚された本覚心である。現実的には初発心して仏道に帰依したその一念をいう。されば発心は信後に生起するものではない。自己をして仏道に向わしめるゆえんのものが、他ならぬ発菩提心であるから、発心は信と同参し同一味であるといわねばならない。いうまでもなくその信は他に発するのではなく、自己の「身心のなかにして、発菩提心するなり。諸仏の身心中にして、発菩提心するなり。仏祖の皮肉骨髓のなかに

して発菩提心する」(発無上心卷)のに他ならない。まことに生仏一躰の信に立って、自らに発する性質のものである。この点、「大日経」一、入真言門住心品に「¹⁰仏言菩提心為因。悲為根本。方便為究竟。秘密主云何菩提。謂如¹¹実知¹²自心¹³」といい、「大乘義章」九、発菩提心義三門分別にも「菩提真性由来已体。(中略)知菩提性是已体故。菩提即心無異求。故心即菩提。捨¹⁴彼異求¹⁵歸¹⁶心自実¹⁷故名¹⁸発心¹⁹」という。このように心の真性を知るところに菩提心の発揚が胚胎する。自己の本性、すなわち自己即仏としてのその本来性があらわとなって発菩提心するのである。本来ある菩提心が激発して発菩提心となるから「これみな発菩提心中にして、さらに発菩提心するなり」(発無上心卷)というべきである。

かかる菩提心のすがたは有心や無心ではない。「身心学道卷」に「発菩提心は、有にあらず無にあらず、善にあらず悪にあらず無記にあらず」とある。有心は有所得心であって、名聞利養を求めようとするものであり、無心はここでは誤れる一切皆空観としての頑空の心であるから、兩者ともに偏執対立の心である。「学道用心集」四にも「²⁰仏法以²¹有心²²不²³可²⁴得²⁵。以²⁶無心²⁷不²⁸可²⁹得³⁰」という。有無の両辺を離れ、さらに無記をも遠離する、評価の領域を超越しているのが菩提心である。

慮知心の菩提心への方向づけは、まず観無常心に発揚される。「学道用心集」一に、竜樹の観無常心を菩提心と称するこ

とを以て、菩提心を提示している。いうまでもなく無常には、刹那無常と相続無常とがある。前者は瞬間の刹那にも生、住、壊、滅の変化があることを意味し、後者は一期相続の長期間に生、住、壊、滅あることを意味する。現実諸相の事実認識としての無常観は、仏教にあっては単なる消極的な一面に止まらず、積極的に修道上の策励に供するところに、無常の価値をみる。無常なるが故に人生を逃避するのではなく、真実に道を修せんとする積極性を胚胎するものである。「重雲堂式卷」に「堂のうちにて……道業のいまだ通達せざることをかなしむべし。光陰のひそかにうつり、行道のいちをうばふことををしむべし。をのづから少水のうをのこゝろあらむ」とある。これは「出曜経」三に「³¹是日已過、命則随滅、如³²少水魚、斯有³³何樂³⁴」に相通するものがあるが、要するに無常観による修道への勸説に他ならない。さらに「衆寮箴規」に、「道業未³⁵成、身命無常、光陰難³⁶繫。然則十方雲衲專惜³⁷光陰、而精進須³⁸如³⁹救⁴⁰頭燃⁴¹。努力莫⁴²閑談而空過⁴³時節。石頭和尚曰、謹白⁴⁴參玄人、光陰莫⁴⁵虚度⁴⁶」とあるのは、無常観による行道の一段の昂揚である。禅師自身「我れ始て、まさに無常によりて、聊か道心を発し」(随聞記四)と述懐し、身を以てこの間の消息を立証している。

「恁麼卷」に「吾我のほとりにととこほるものにはあらず、恁麼なるに無端に発心するものあり」という如く、観無

常心は世俗的諸欲の執著を消化し、修道への精進を強化し、修証へと発現する。それが坐禪として実践化される。坐禪弁道も発心の具体相であるとなし得る。観無常心が発心となる。それは本証（発心）が観無常を契機として発心となったものに他ならない。かくして発心が修証と現われ、坐禪と現われる。種々な相状を異にしても、ひとしく一発心の具体相である。ことごとく仏祖の形儀であり、不染汚の修証であることにおいては変りはない。まことに発心を坐の相にて発現したものが本証の坐に他ならない。「発無上心巻」に「坐禪弁道、これ発菩提心なり。発心は一異にあらず、坐禪は一異にあらず」とあるゆえんである。単に打坐のみに限定されるものではない。坐以外の生活諸行も発心の行的展開であることはいふを俟たない。

それでは発心の行的発現としてのその具体相はどうか。発心は転法輪に、はたまた造像起塔などと種々な相状に展開する。まことに造像起塔などは発菩提心であると信解すべきである。「発無上心巻」に「しかのみにあらず、知_二家非_一家、捨_レ家出家、入山修道、信行法行するなり。造仏造塔するなり。読経念仏するなり。為衆説法するなり。尋師訪道するなり。結跏趺坐するなり。一礼三宝するなり。一称南無仏するなり。かくの如く八万法蘊の因縁、かならず発心なり」といふ。八万の法蔵、信に基く一切の行法、皆発心による。造仏

造塔も発心に基因することはいうまでもない。かかる発心の現成としての造仏造塔が、仏祖道を自己に發揮せしめるものとなし得る。一茎艸、一微塵の価値を充全ならしめるのは、一に発心の妙用によるといわねばならない。禪師の宗教には、一面崇高な理の立場があると共に、他面、極めて熾烈酷逼な事の立場が存する。低い事の立場が直ちに高い理の立場と相即する。造仏起塔という極めて普遍的通俗的仏教行事が、発菩提心を媒介としてそのまま直至成仏であることに無限の価値を發揮してくる。仏道は精舎の中に閉じ籠められた仏教ではなく、艸木瓦礫を身心となし、風雨水火を身心とするものである。艸木瓦礫や風雨水火は単なる自然現象に過ぎないとみるのは、凡庸の偏見である。禅眼を以てみる時、それらは唯心としての存在となり、実相としての諸法となり、法性となり、仏性となり、真如となり、仏祖となる。そこに無限の説法が響き、清浄法身が現ずる。しかもかかる宗教的価値と意義の發揮は、発心によってよく将来されることを肝銘すべきである。かくして発心は、「おほよそ発菩提心の因縁、ほかより菩提心を拈来せず」（発無上心巻）とある如く、自己内在本具の菩提心をして、発菩提心して顕在化したものに他ならない。他から菩提心が来るものではない。自ら本来具有しているものを激揚したまでである。その自心の発現が如上の如き菩提心行となる。そのことを縁として、さらに因

としての菩提心が自らに光輝を放ってくる。このようにして発菩提心を百千万発する。それが直ちに仏道を無限無間断に現成せしめることとなる。発心の相続であり、信の相続である。かくして仏道を無間断に現成せしめながら、「菩提心をおこしてのち、三阿僧祇劫、一百大劫修行す。あるひは無量劫おこなひてほとけになる」(「発菩提心卷」)のである。否、発心後無量劫の修行を経てはじめて成仏するのではない。初発心時便成正覚である。菩提心が菩提心を発するのであるから、発菩提心がそのまま得菩提心である。「説心説性卷」に「仏道は、初発心のときも仏道なり。成正覚のときも仏道なり。初中後ともに仏道なり」という。本来仏道中の発心である。時々のは発心は時々成仏道である。前中後ともに軽重はない。しかもこの間ただ無心無我に、菩提心に打成一片するのみ。「永平広録」五、にも「然而一向專求無上菩提、精進不退、是名發菩提心。既得此心現前、尚不下為菩提而求菩提、此是真実菩提心也。如無此心、豈為學道」という。ただ菩提心の純粹相続で、二念なく生々世々を通じ、自己の仏光明を激揚していくのである。単に時間上、菩提心の無間断の相続ではない、「發菩提心の正當恁應時には、法界ことごとく發菩提心」(身心學道卷)でなければならぬ。空間的にも法界ことごとくの發菩提心の聖化である。

四

道元禪の発心は自己形成の上のみ限定されるものではない。本証(菩提心)の発露は、慈悲心のそれへと開示される道理である。この意味にて「永平広録」八、に、「發菩提心者、乃度衆生心也」といい、「永平室中聞書」に「先師(道元)云。我專習道心。而道心最真實者。濟度衆生」という。「發菩提心卷」には後述の如く、度衆生心を菩提心に、または自己が成仏得道する功德を衆生のそれに廻向する心をして菩提心となしている。しかも道元禪の発心は、現在のこの身にて出家在家、苦樂の如何を問わず、直ちに自未得度先度他(た)の心を発し、その行願を徹底して、大乘菩薩の行願に參入することである。「大乘義章」九、發菩提心義三門分別に、衆生をして生死苦を出で涅槃樂を得せしめんがために、衆生に先立ってまず自己が涅槃樂を得ようと発心するといっている。衆生救済のために、衆生に先立って救いうる自己を形成するために得度の発心をするという。これに進一步しているとみられるのが、衆生と共に得度せんと発心する立場である。「摩訶止觀」卷一下に、仏の相好をみて上求下化する發菩提心を説いているなどはその一であるとなしうる。これよりさらに進んだものは、自己の得度に先立って衆生の度脱を發心するという立場であらう。「兩卷無量壽經宗要」に「自未得

度「先度レ他。是故我礼ニ初発心」といい、「心地観経」三に、大中小三品懺悔のうち中品懺悔について、「精修度ニ脱衆生、自未得レ度先度レ佗、尽ニ未来際ニ常無レ断。如レ是精勤勇猛者、不レ惜ニ身命一求ニ菩提」というのは、概ね自己より先に衆生を渡さんと発願する例証とされるところである。この意味において、道元禪師の発心思想もまた最も高次な性質のものであるとなし得る。「発無上心巻」に「この刹那生滅流転捷疾にありながら、もし自未得度先度佗の一念をおこすがときは、久遠の寿量、たちまちに現在前するなり」とある。菩提心の発露としての自未得度先度佗心の發揮は、よく而今に永遠の価値を生かすものといわねばならない。

「大乘起信論」解釈分、対治邪執にて、信成就発心、解行発心、証発心の三種発心を明している。信成就発心は、十信と十住のものが、業報を信じ、十善をなさんと志し、仏智を求め、一万劫を経て信心成就して、発心を得、不定聚を出て正定聚に入る。解行発心は正しく十行より十回向に進み、深く真如の理を解し、執著を離れ、六度を行ずる、経劫は一大阿僧祇である。証発心は真実発心で、真如智に証達し、化他自在である。これは菩薩十地の位においてなされるので、初地より七地に至る間を第二阿僧祇とし、八地より十地に至るのを第三阿僧祇と釈している。これによれば、発心して菩薩十地位に到達するには歴劫無量時を要する。しかし道元禪

の発心は而今に得脱して余りあるものとなすのである。

菩提心は自未得度先度佗の心に限定されない。進んで一切衆生をして菩提心を起さしめようとする心も菩提心である。自己犠牲の度衆生の誓願は、仏道の通則である。しかし衆生をつくしてその心を発さしめることは、極めて積極的かつ進歩的な発心思想である。「発菩提心巻」に「衆生を利益すといふは、衆生をして自未得度先度佗のころをおこさしむるなり。自未得度先度佗の心をおこせるちからによりて、われほとけにならんとおもふべからず」とあり、「おほよそ菩提心は、いかがして一切衆生をして菩提心をおこさしめ、仏道に引導せまじと、ひまなく三業にいとなむなり。いたづらに世間の欲樂をあたふるを、利益衆生とするにはあらず」とあるのはそれである。自己が積集した善根功德を他に施与することとは衆生回向であり、己が積集した善根功德を以て自他ひとしく仏果菩提を体認しようとすることは仏道回向である。禪師の菩提心はこの両回向を統攝し、かつ万人の願行たらしめんとするのである。

それでは菩提心を発す場所についてはどうか。「身心学道巻」に「発菩提心は、あるひは生死にしてこれをうることあり。あるひは涅槃にしてこれをうることあり。あるひは生死涅槃のほかにしてこれをうることあり」という。また夢中、醉中、飛華落葉中、桃華翠竹中、天上、海中、四趣中にも

発心得道の可能を説く。叢林にして菩提心を発し、靈雲の如く桃華裡にして発心し、香巖の如く撃竹辺に発心得悟するなど、その人の因縁によって不定である。まことに「ところをまつにあらされども、発心のところにさへられざるなり」(身心学道卷)というべきである。

五

次に浄土教、なかんずく親鸞教学の発心思想と道元禅のそれとを対配してみる。まず両教の類似性をみる。(一)菩提心は必須のものでなければならぬ。(二)発心は万人に普遍であり、可能である。(三)菩提心は信と同時に参する。(四)発心は無我相のままながらに、しかも永遠に純粹持続されねばならぬ。(五)発心の利他的部門として、曇鸞に発する度衆生心は道元禅の度衆生心に相即する。(六)附記として、語調上相似の点がある。「歎異抄」五に「たゞ自力をすて、いそぎさとりをひらきなば、六道・四生のあひだ、いつれの業苦しづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり」とあり、「谿声山色卷」に「もし菩提心をおこしてのち、六趣四生に輪転すといへども、その輪転の因縁、みな菩提の行願となるなり」とある。「歎異抄」は覺他利他の発心であるのに対し、道元の上掲の語は、強いていえば、自覚中心のそれである。このようにその直接志向するところを異にしているけれど

も、類似の語調に興味を以て注目せしめられる。(七)同じく附带的なものであるが、思想と語調と同軌のものがある。菩提心を内にはらむ信発現の念仏について、法然が「念仏行者訓条」に、「われほどの念仏者よもあらじと思ふはひが事也。大橋慢にてあれば、それをたよりにて、魔縁の付て往生をさまたぐる也」という。同じく菩提心内具の入信後のあり方に關して親鸞についての次の言がある。蓮如の「御文章」二帖三に、「聖人(親鸞)のいはく、たとひ牛ぬす人とはいはるとも、もしは後世者、もしは善人、もしは仏法者とみゆるやうにふるまふべからずとこそおほせられたり」とあるのはそれである。これらと類似しているものに、「谿声山色卷」の次の語がある。「おほよそ菩提心の行願には、菩提心の発未発、行道不行道を、世人にしらんことをおもはざるべし。しられざらんといとなむべし。いはんやみづから口称せんや。いまの人は実をもとむることまれなるによりて身に行なく、ところにさとりなくとも、佗人のほむることありて、行解相應せりといはん人もとむるがごとし。迷中又迷、すなはちこれなり。この邪念すみやかに抛捨すべし」。いずれも外相に自現せず、自らうちに深く蓄え潜行密用すべき慈訓において同調するものがある。

次に相異性をみる。(一)発心の契機は、浄土教一般のことではあるが、親鸞教学では罪惡相の省慮にあるのに対し、道元

禪にては觀無常心にある。(二)菩提心は親鸞教にては、他力廻向の信の上にも見るのに対し、道元禪にては、本証の自覺の上にも見る。換言すれば、兩教信相の相異が菩提心觀のそれを示している。(三)親鸞教にては信上にも見る菩提心の流露は、念仏となる。また常行大悲的發現となることは否み得ない。それは道元禪ほどの主体性と能動性と広域性を帯びてはいない。すなわち道元禪にて発心は、坐禪弁道となり、造像造仏起塔となる。このようにして生活諸行に広くかつ積極的展開を示すものである。このことは他面、兩教行觀の相異が、兩菩提心觀のそれと同調するものであるとされる。(四)善導に発する衆生と共に同じく発心しようとする思想が、浄土教にあることは否み得ない。しかし道元禪は自己に先立って衆生を得脱せしめようと発心する。さらに衆生に発心せしめようと自ら発菩提心する。このことは浄土教にてはみることのでき得ない思想であるといひ得る。(五)親鸞の発心は自ら往生し還相位に立ち、普賢の行願裡利他の菩提心を実とするのであるから、彼土往生後に、したがって未来の様相を示す、これに対し道元禪にては此土に、しかも而今に発心を見るの特質を示すものといわねばならない。

- 1 浄全五・八二頁下。
- 2 浄全一・八五頁上。
- 3 此無上菩提心、即是願作仏心。願作仏心即是度衆生心。度衆

- 生心即是攝取衆生。生有仏国土心。是故願生彼安樂淨土者、要發無上菩提心也。若人不發無上菩提心、但聞彼國土受樂無間、受樂故願生、亦當不得往生也。(これを「信卷」還相廻向釈に引用)
- 4 善導はなお次の如く菩提心を表白している。願從今日乃至不起忍己來、誓共衆生捨邪歸正、發菩提心慈心相向、仏眼相看。菩提眷屬、真善知識、同生淨土、乃至成仏。(法事讚上末)始從今日、願共法界衆生、捨邪歸正、發菩提心、慈心相向、仏眼相看、菩提眷屬、作真善知識、同生阿彌陀仏國。(往生禮讚、日中讚)歸仏得菩提道心、恒不退、願共諸衆生、回願往生無量壽國。(往生禮讚、日沒讚)
 - 5 これを「高僧和讃」天親讚に、「願作仏の心はこれ、度衆生のこゝろなり、度衆生の心はこれ、利他真実の信心なり」「信心すなはち一心なり、一心すなはち金剛心、金剛心は菩提心、この心すなはち他力なり」と詠じ、また「正像末和讃」三時讚に、「浄土の大菩提心は、願作仏心をすゝめしむ、すなはち願作仏心を、度衆生心となげけたり」「度衆生心といふことは、弥陀智願の廻向なり、(後略)」と歎じている。
 - 6 文は略し、所在のみを記す。即心是仏卷、發菩提心卷、身心学道卷、佗心通卷、重雲道式卷、学道用心集の可發菩提心事、隨聞記一・五、知事清規。
 - 7 曹全、史伝下九頁下。
 - 8 大正、四六・四頁上。
 - 9 註解全書、八・一〇八頁。

- 10 大正、十八・一頁中、下。
- 11 大正、四四・六三六頁上、中。
- 12 大正、四・六二一頁中。
- 13 大正、四四・六三六頁中。
- 14 大正、四六・六頁中、下。
- 15 浄全、五・八二〇頁下。
- 16 大正、三・三〇四頁上。